



とう れい ぜん じ

# 東嶺禪師のふるさと五個荘町

花園大学図書館長  
能登川町興福寺住職  
西村 惠信

平成5年の4月、滋賀県の産んだ類い稀なる禅僧、東嶺円慈和尚の没後200年を記念して、琵琶湖文化館と三島市の佐野美術館との協催で「東嶺の禅と書」という展示が催されたのをご存じの方が多いと思います。この東嶺さんは享保6（1721）年から寛政4（1792）年まで72年の生涯を生きられた方で、徳川8代将軍吉宗の時代、駿河の国（静岡県）原宿

（沼津市原町）の松蔭寺におられた白隱慧鶴和尚を扶けて、当時すでに衰退していた日本の臨済宗を中興された高徳の禅僧であります。この東嶺さんが、本県神崎郡五個荘町小幡字出町の出身であることを、地元でも知る人が意外に少ないので残念でありますので、この機会にご紹介しておきたいと思います。

私は東嶺さんが他の文化人のように、ただ単に近江の地に生まれたというだけで、生涯この地を離れて過ごされた方ならば、それほどに慕わしく思わなかったかも知れません。ところが、東嶺さんはその名が天下に聞え、人々に請われて全国津々浦々に杖を曳かれるようになってからも、しばしば故郷を訪れておられるばかりか、自分の死の近いのを予感すると、駕籠を飛ばして父母の土地五個荘に帰り、そこで生涯を閉じられたということを知るによよんで、私は東嶺さんが示された人生の「始末」という点において、ひとしお深い畏敬の念を覚えるのです。よく「終りを慎むこと始めの如し」とか、「晩節を尽くす」とか言われますが、人間たるもの最後の締め括りこそが大切で、東嶺さんがそれをなさったことは、この人が常に初心を忘れなかつたことを示すよき証拠であると思うのです。

東嶺さんのなさった業績については禅宗の専門的なことですから、ここで詳しく述べることを控え、かって私が書きました『訓注・東嶺和尚年譜』（思文閣出版・1982）や、琵琶湖文化館の『展示図録』解説など



東嶺頂相

に譲ることにしたいと思います。それでここでは湖東が舞台となる東嶺さんの若い日の様子や、この世を去られる時のことなどについて述べておくに留めたいと思います。

国道8号線を車で安土の辺りから彦根の方へ走ると愛知川の御幸橋<sup>みゆきばし</sup>にさしかかります。橋の手前を右に折れて、堤防を東へ30米程行ったところをさらに右へ降りると、それがかつての中山道ですが、道に沿って300米あたり行った右手に大きな鶴<sup>むち</sup>の木のある家があり、その板塀の外に「東嶺禪師御生誕地」の碑が建っています。ここが東嶺さんの生家中村家の跡です。いつ通っても、碑には花が供えられていますが、うっかりすると通り過ぎてしまいそうな秘かな佇まいです。土地の人はそれがどんな偉い人の碑であるかを知るよしもなきかに通り過ぎておられるように見えます。

この家では享保の頃、中村善左衛門という



生誕地碑

人が薬肆（薬屋）を営んでいましたが東嶺さんはこの嫡子でした。弟子の大觀文珠といいう方が編した『龍沢創建東嶺慈老和尚年譜』によると、享保10年にこの辺りにやって来られた日向の国（宮崎県）大光寺の古月禪材和尚が、たまたまこの中山道沿いの宿場、小幡駅出町の中村家に投宿されたのが事の始まりです。時はあたかも將軍吉宗が享保の改革をおしすすめている最中に当たります。

古月禪材和尚といえば、この頃知る人ぞ知る、東の白隱和尚と並んで天下の二甘露門とうたわれた臨濟宗の高僧ですが、この近江の地方には当時、松島瑞巖寺の雲居希膺和尚の流れを汲む禪僧たちが活躍していましたので、そういう人たちの縁でこの地に曳杖されたものらしく、いまでもあちこちに古月和尚の墨蹟が残されています。

古月和尚が滞在され、それを鄭重に接待する父の様子を見ていた5歳の東嶺さんが、自分もあのように人の尊敬を受ける立派な坊さんになりたいものと思い、しきりに父母に出家を願い出るのですが、東嶺さんは中村家の嫡子ということでなかなかお許しが出なかつたのです。親の許可なしには出家できないのが印度以来の仏教の習いです。

もともと中村家は古月和尚を泊めるくらいの家ですから名門で信仰心の厚い家庭であって、母なる人も篤信家で子供の頃の東嶺さんは、母の歌う西国巡礼のご詠歌に深い宗教心を養われたと言います。

割愛の思い（出家の志）止みがたく、9歳の時、東嶺さんはとうとう願いが叶って出家することになります。晚秋の11月21日、父に連れられて小幡を出た東嶺さんは、恐らく聖徳太子の遺跡である石馬寺の山を登り、いわゆる地獄越えの峠を越えて伊庭の里にくだり、現在の能登川にある大徳寺にやってきたのでしょうか。そして時の住持であった亮山惠林<sup>りょうざんえりん</sup>という人の弟子となり、剃髪し新しい衣を着け、僧名も慧端<sup>えたん</sup>と改めて禪僧の卵になったのです。



大徳寺本堂

伊庭は佐々木源氏の末裔伊庭氏が開いた土地で、今でも歴史的遺産の多い所ですが、大徳寺ももとは伊庭一族の建てた臨済宗東福寺派の巨刹で、徳川期になってそこへ雲居希膺の門流が入り妙心寺派に転派していました。亮山和尚はその第4世の住持で、大徳寺の塔所には今でも亮山和尚の塔がひっそりと佇んでいます。

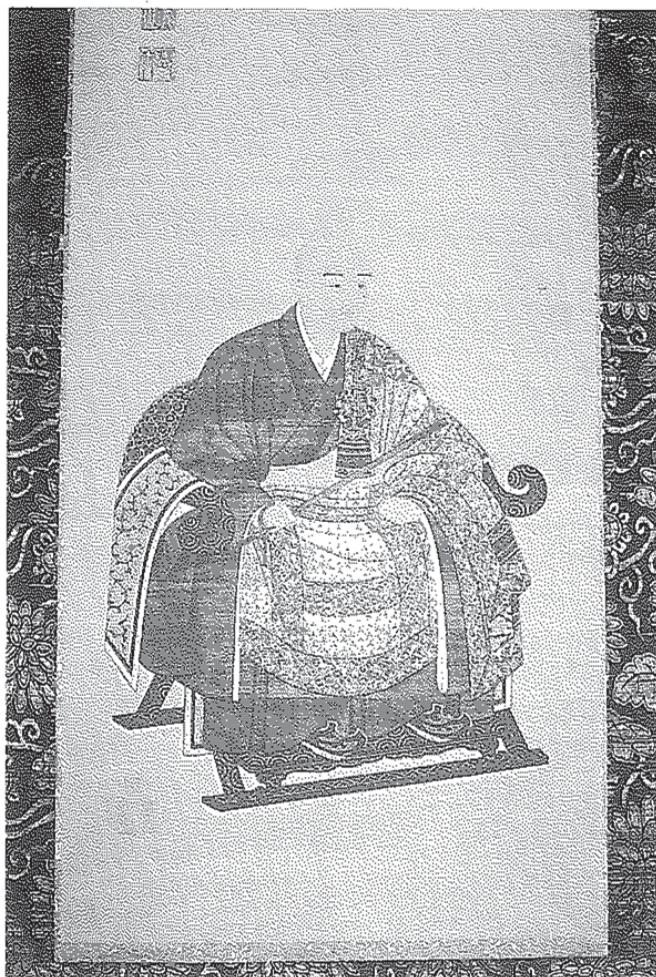
『東嶺年譜』にはこの日から後、14歳までの5年間の記述がまったくありませんが、察するところこの間に東嶺さんは、学問の豊かな閑栖の翠峰和尚や師の亮山和尚から、しっかりと禪僧としての雛僧教育をたたき込まれたものと思われます。それ以外の時期の東嶺さんは坐禅修行専一で学問をした形跡がないのです。基礎的な読み書きはこの間に身に付けられたに相違ありません。

14歳のとき、亮山和尚が所用のため京に上るというので、東嶺さんは亮山和尚について京に登り、水谷憧南けいなんという時の画師に頼んで

亮山の頂相（ちんそう・肖像画）を描かせたというのですから、その老成ぶりには驚くべきものがあります。大徳寺にはいまも水谷憧南署名入りの亮山和尚の頂相が残っています。

東嶺さんが師匠の肖像画を描かせた理由は、近いうちに大徳寺を飛び出す下心があったからで、常に師の肖像を懐にするためであったのです。実際、東嶺さんはその3年のち、17歳で師に無断で寺を飛び出してしまったのです。

禅宗では南詢なんじゅん 東請とうぜいといって、天下の善知識を求めて遊方行脚するのが習わしです。東嶺さんもここでじつとしていては修行にならないと思い始めると求道の志おさえがたく、亮山がこれを許さないとなると、僧名を勝手に「道果」と改め、秘かに「南方發足文」と題する漢文の長い決意文をしたため、早春2月6日の朝これを本尊仏に献じると、すたすたと大徳寺の門から出ていってしまったのです。向かう先は遙か日向の国（宮崎県）大光寺に



亮山和尚頂相(憬南画)



亮山和尚の塔(大徳寺)

ある古月禪材和尚でした。

瀬戸内海の船上にあること11にして豊後（大分県）臼杵に至り、月桂寺や多福寺で3か月間の安居（坐禅修行）をした後、道友を引き連れて目的地の大光寺まで行脚し、ついに念願の古月和尚の膝下に旅の道具を解きます。

そのころ大光寺では、古月和尚がすでに引退して閑栖となり、修行の指導は翠巖という若い和尚に代わっていました。その上、この地方は明の国からやってきた隱元隆琦や道しゃちょうげん超元などの新風の黃檗禪が盛んで、やたらに儀法（お授戒）ばかりして、肝心の坐禅修行の方はなおざりでした。東嶺さんはそれが不満で、結局2年後の春にさっさと大光寺を引き上げて京に帰ってきます。

東嶺さんは既に19歳になっている自分に驚き、このようなことではせっかく出家した意

味がないと焦り、京の都や丹波の地に隠れた禪匠を訪ね歩きましたが、それぞれの説かれ内容に違いがあるので、どれが正しいのか棟札しがたいことに失望し、21歳で大徳寺亮山和尚のもとに帰ってきます。

亮山和尚は東嶺さんの志を憐れんで、その頃日野の妙楽寺に住んでいた法叔の諦道和尚と相談し、日野杉榎の山中にある蓮華谷に、東嶺さんが修行するための小さな庵を結んでやります。

八日市から車で約20分。中山道を離れて鈴鹿から桑名へ抜けるいわゆる千種越えの道沿いに蒲生郡日野町大川原という寒村があります。杉・榎・川原と3つの集落を集めて150戸ほどの農村で、今でもここを杉榎と呼んでいます。

ネムの木や漆の木、櫟や栗の木と大小の灌

木の林を踏み分けて山の断崖に入ると、今でも大きな自然石の礎石があり、その上に高さ2.5米ほどの薄緑の石盤が建っていて、そこに東嶺さんが悟りを開かれた時の「投機の偈」<sup>とうきのげ</sup>が刻まれています。訓読すると次のようになります。

辛酉の秋、江東蓮華谷に山居し精修して日を累ぬ。一日、過倦して全身保ち難し。自ら謂って曰く、道高ければ魔盛んなり。我れ此の生、誓って道を求めずと。而して當に投身後倒せんとするに、超然として山河並びに大地、全く法王身を露わすことを見て徹す。

法王身や法王身、山河大地一塵を絶す。  
も  
仏教祖禪元と我に在り、頭々少林の春ならざるは無し。

### 東嶺

東嶺さんはこの蓮華谷で独摂心（一人で坐



蓮華谷独摂心の地

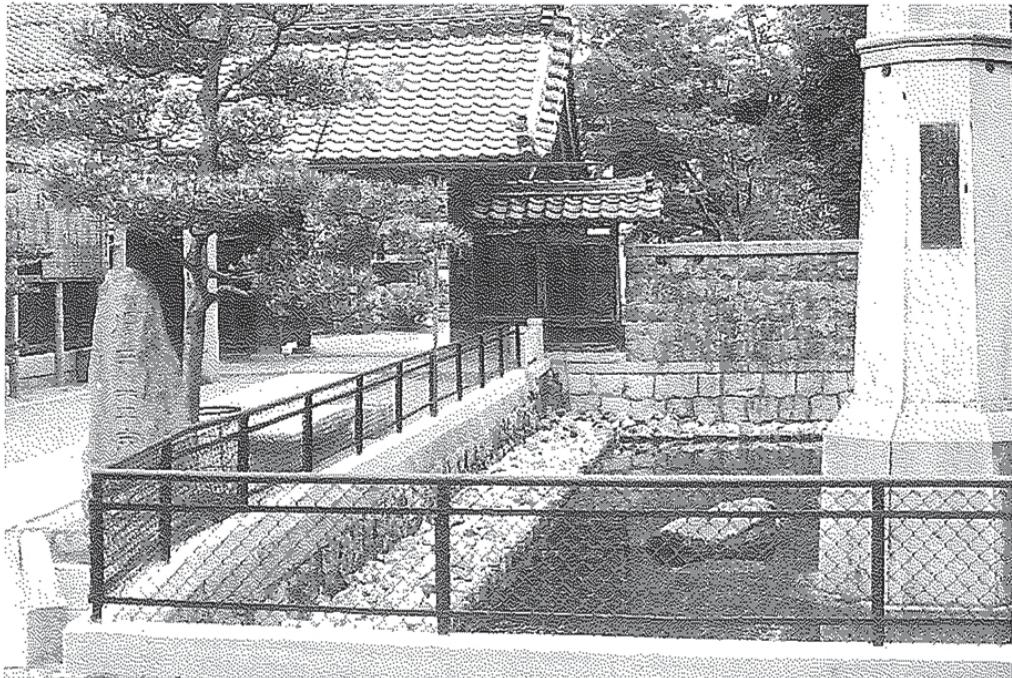


齡仙寺縦檀齒髪塔

禪に没頭すること）をしましたが、自分のようなものはいくら修行しても悟りを得ることはできないと諦め、いっそこの道を捨ててしまおうと観念し、疲労困憊して後ろへ倒れようとした途端にパッと悟りを開かれたのです。そこでこの悟りが正しいものかどうかを確かめるために、遙か駿河の国にその名も高い白隱慧鶴和尚を訪ねることになります。

白隱和尚の下には、北は奥羽、南は沖縄から大勢の雲水たちが集まって坐禅に励んでいました。東嶺さんは到着早々その学識が認められ、すぐに白隱和尚の著作の手伝いを命ぜられます。しかし、悟りの内容となると、白隱和尚はまだまだ東嶺さんを突き放してしまいます。

それからが東嶺さんの修行は本格的になり、しばしば剃らず浴さずの坐禅三昧の日が繰り返されますが、その身命を惜しまぬ修行ぶりをここに述べることはできません。そのよう



齡仙寺門景

にして29歳に至り、遂に白隱和尚の活面目を奪取しつくし、白隱和尚から印記（禪僧としての免許皆伝）を受けられたのです。

東嶺さんはそれ以後、白隱和尚を扶けて駿河の地を中心に江戸から美濃尾張あたりまで席の温まる暇なく東奔西走し、その生涯を閉じる日まで臨済宗の拳揚に勤めました。その間、故郷小幡の地に帰ること一再ならず、また蓮華谷を訪ねて若かった日を懐かしんでおられます。

特に故郷小幡の齡仙寺（現在五個荘町字中にある妙心寺派の寺）には「総檀歯髪塔」を建て、真先に両親の歯髪を収めて供養し、また『父母恩難報経』や『神儒仏三法孝経』などを講じて、父母の恩の尊きことを説くとともに、また伊庭大徳寺亮山和尚塔にも足を運んで、大徳寺補席（後任住職）の招聘を断つた身の不幸を詫びられたのであります。

東嶺さんは幼少の頃から、寺子屋通いの悪童たちが捨てた虱さえ拾って自分の首に付けたというほど豊かな人情の人でありながら、仏道修行のためとは言いながら、敢えて世俗的な面において徹底的に非情を貫かれたこと

は、まことに出家者の範というべきであります。

71歳の10月、犬山の輝東庵に居た東嶺さんは俄に身体の衰弱を感じ、命旦夕に迫ったのを察知すると、美濃（岐阜県）大垣の華渓寺に講演にきていたのを幸いとばかり、そのまま駕籠を故郷小幡に飛ばせ、生家に帰って床に臥され

たのです。

3日して中村家から近くの齡仙寺に移って病臥されていると、弟子たちが集まってきて頻りに犬山輝東庵への帰錫を勧めたのですが、東嶺さんは前月に輝東庵を出るとき既に、弟子の玄如に向かって「自分は来春を待って遷化（死ぬ）する」と予言していましたので、そのまま齡仙寺でその歳を越し、翌年2月19日、亥の刻（深夜12時）、弟子たちに囲まれ溘然として遷化されていったのであります。時に寛政4年、東嶺さん72歳であります。「葉落ちて根に帰す」如く、父母の地に帰ってその大生涯を終えられたことを、『年譜』の編者大觀文珠は唐の時代の六祖惠能大師と同一三昧であると讚嘆し、これぞまさしく禪者の標ではないかと特記しております。

滋賀文化財教室シリーズ No.154号

発行年月日 1995年12月1日  
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525